

オンライン海外留学の実施と効果の検証 ～BEVI および事後アンケートによる分析～

清藤隆春・橋本智

徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班

1. はじめに

徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班（「インターナショナルオフィス」）では、毎年夏休みを利用して全学部学科の学生を対象に海外留学プログラムを企画し、海外の大学・教育機関へ本学学生を派遣している。しかし、2020年2月以降、新型コロナウイルスの影響で、全ての海外留学プログラムは中止している。

海外留学に代わるプログラムを実施するために、2020年5月に米国の南イリノイ大学、韓国の慶北大学校、台湾の淡江大学に相談を持ちかけ、3つのオンライン留学プログラム（中国語・台湾文化2週間、韓国語・韓国文化2週間、英語・米国文化4週間）を開発し、本学から合計45名の学生が参加した。

本稿では、台湾の淡江大学と共同で実施したプログラムを取り上げ、その経緯や内容の概要を説明するとともに、BEVI および事後アンケート結果を用いてプログラムの効果の検証を試みる。

2. プログラムの概要

学内のニーズ調査を踏まえ、中国語圏のいくつかの大学に中国語や文化学習、学生交流をオンラインで行う「夏期留学プログラム（2週間）」の共同開発について申し入れたところ、淡江大学から承諾を得たため、同大学と連携することとした。

対面の説明会を開いて学生へ案内することができないため、各部署や中国語担当教員に学内のポスター掲示や、授業での紹介を依頼した。参加者は7名で、全員に夏期オンライン研修支援奨学金3万円（受講料の約半額）を支給した。

事前の口頭および筆記試験の結果を踏まえ、初級クラスと上級クラスを設定した。授業は月曜日

から金曜日まで毎日 Google Meet を利用して行われ、淡江大学ネイティブ講師による中国語講義が2時間、淡江大学の学生との文化交流が1時間の計3時間の構成である。

プログラム前後には始業式（図1）と終業式を行った。終業式には、本学教育担当理事が挨拶を行い、本学学生が学習の成果発表として中国語でスピーチや演劇等を披露し、プログラムは終了した。



図1 淡江大学オンライン留学の始業式の様子

3. 事後アンケートの結果

プログラム終了後のオンラインでの事後指導で承諾を得た上でアンケートを実施した。質問は、Microsoft の Forms を用いて、記名式の5段階評価形式で、自由記述欄も設けている。また、A4用紙1枚程度の感想文も提出させた。

アンケートは全ての項目で肯定的な回答となった（表1参照）。特に、「学習の動機付け」の評価が高く、5名の学生が具体的に中国語検定の受験意思を記していた。「留学の動機付け」の項目も高く、5名がコロナ収束後に実際に台湾に訪れたいと記している。また、少人数制のきめ細かい指導により、授業満足度も高くなっている。

一方で、学生交流は相対的に低い結果となった。肯定的な感想も多く見られたが、「台湾人の友達

ができた」と答えたのは約半数であり、感想文からも、「教える学生」と「教わる学生」の関係を越えて「友達」の関係を構築するのは容易ではなかったことが窺える。

表1 アンケートの平均点（5段階評価）

学習の動機付け	5
留学の動機付け	4.7
オンライン留学満足度	4.7
語学力向上実感	4.7
授業満足度	4.7
学生交流の満足度	4.4

4. BEVI を用いた分析

近年、短期留学の成果を評価するため、特に目にみえづらい学生の情動的・心理的变化の客観的な測定を目的として、BEVI¹⁾ (The Beliefs, Events, and Values Inventory) というオンライン評価を導入する大学が増えている。BEVI は1990年初頭に米国で開発が始まり、日本人学生も含めて数万件のデータが蓄積されている。基本情報(40項目)及び質問(185項目)から構成され、質問に対する選択肢は4段階で、統計的に対になっており最終的には9段階に分類される尺度もある。テスト結果は、プログラム参加直前(T1)と直後(T2)との比較をもとに17のスケールで見ることができる。図2は淡江大学のプログラムの結果の一部である。

本稿では、グローバル人材²⁾の育成において重要な「批判的思考」、「他者理解」、「世界への共感」の変化測定に絞って結果を分析する。そのために、17スケールのうち、①「Basic Determinism (基本的な決定論)」、②「Gender Traditionalism (ジェンダー的伝統主義)」、③「Global Resonance (グローバル世界への関与)」の3つのスケールを取りあげる。

①はステレオタイプに物事を決める傾向を表すが、参加学生のポイントは大きく変化している(36→19)。元々物事を白黒で判断しないタイプのグループであったが、違いを受け入れて多様な価値観を受け入れようとする傾向が強まったと考えられる。一方で、②については、ほとんど変

化していない(25→21)。元々リベラルな傾向にある集団であったため、このプログラムで大きな影響を受けることはなかったと思われる。③は世界への関与を望む度合いを示すが、元々数値の高い集団であり、大きな影響を受けていない(72→73)。しかし、T1で数値の低かったグループ(海外未経験の1年生の集団と思われる)に限定して結果を見ると、46から54に変化しており、自分とは異なる人々の集団に溶け込もうとする力が上昇していることが分かる。

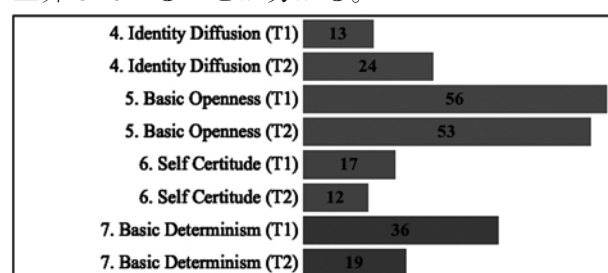


図2 BEVI の結果の一部

5. 今後の課題

アンケート結果から、学習の動機付けや留学の動機付けに関して特に効果があったと考えられるが、学生交流については課題が残った。BEVIの結果から批判的思考については一定の効果があることが明らかになったが、他者理解や世界への共感については明確な変化が見られなかった。今後、他のオンライン留学プログラムとの比較を通じて、多面的な考察を行なっていきたい。

6. 参考文献

- 1) 「BEVI 公式サイト」<http://jp.thebevi.com> (アクセス日:2020/11/08)
- 2) 文部科学省「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」(産学連携によるグローバル人材育成推進会議)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (アクセス日:2020/11/08)